

観光振興施策について

八田 憲児

1. はじめに

本市では、びわ湖に代表される「自然」や、世界文化遺産の比叡山を始めとする多くの文化遺産と物語を残してきた「歴史」、そこで培われてきた伝統や文化をもった「まち」とそこに暮らす「市民」が一体的に取り組む「大津市観光交流基本計画」が策定され、平成22年には、基本計画の実現に向けて「アクションプラン」がつくられ、平成25年度から「後期」の事業が推進されている。

また、大津市総合計画 第3期実行計画で観光は、人と地域の活力を高め都市経営に大きな役割を果たすものと位置づけられており、「来訪者が行き交うまちづくり」を目指しており、観光入込客数 1,122 万人/年（平成23年度）の基準値を平成28年度には、1,400 万人/年にする目標を掲げている。

今回当会派は、近年は観光都市として国内のみならず東アジア方面から観光客が訪れ、平成20年に「観光都市宣言」をして、観光入込客数が伸びている北海道小樽市を訪れ、観光振興の現状について見聞し、本市の観光発展のために、有益な政策を提案していけるようにしたい。

【小樽市の概要】

小樽市は、北海道西海岸のほぼ中央に位置し、札幌市など4市町村に接している。東西約36キロメートル、南北約20キロメートルで、市街地の一方が日本海に面し、他の三方を山に囲まれた坂の多いまちである。

海岸線は、約69キロメートルで、その中央には天然の良港である小樽港があり、西側の勇壮な海岸は国定公園に指定されている。

気候は、寒暖の差が小さい海洋性であるため、春は桜と新緑、夏はマリネレジャー、秋は紅葉、冬はスキーと、季節を通じて豊かな自然が特徴的である。

また、市内面積は、243.65 km²で、平成26年3月現在の人口125,875人(世帯数66,069)である。

【小樽観光都市宣言】

平成20年小樽市議会において決議された。今後、市民、観光事業者、観光関連団体、経済界、行政が一体的となって、より質の高い時間消費型観光のまちを目指し、「観光都市・小樽」の宣言がなされた。

～”今こそ”の心意気～

我がまち「小樽」は、海と山に囲まれた美しい自然、四季が織りなす多彩な風景、そして明治、大正、昭和の面影をしのばせ、かつての栄華を今に伝える多彩な観光資源に恵まれた魅力ある都市です。

「小樽」は、まちの将来を巡る運河論争を契機に観光都市として発展し、今や、観光は、まちの基幹産業にまで成長しました。

しかしながら、「小樽観光」が更なる発展を遂げるためには、観光に対する市民意識の向上をはじめ、新たな観光資源の発掘や滞在時間の延長など、いくつかの課題を克服する必要があります。

こうした中で、これからの「小樽観光」に求められること・・・・・・・・・・。

それは、市民一人一人が観光づくりの主演となり、人情味あふれる「小樽気質」でお客様をお迎えし、ふれあいを通じて感動と安らぎを感じていただくとともに、ゆっくりと時間をかけて「小樽」を楽しんでいただくことです。

それが、我がまち「小樽」にとって、何物にもかえがたい喜びなのです。

今こそ・・・「小樽」は、多くの人に愛されるまち、より質の高い時間消費型観光のまちを目指し、ここに「観光都市・小樽」を宣言します。

【小樽の主なイベント】

○半世紀近くの歴史をもつ、北海道を代表する夏のイベント「おたる潮まつり」、小樽観光の最大の入り込みが見込める花火大会、今年は、あいにく雨で中止になったとのことだが、6,000人が練り歩く「潮めりこみ」が開催されていて、夏の一大風物詩となっている。

○厳しい寒さのある2月は、雪とろうそくの灯りが小樽のまちを包み込む「小樽雪あかりの路」は、2月上旬から、小樽運河、手宮線跡地などを中心に開かれ、人気を博している。

2. 小樽市における主な観光資源等について

①ながめる おたる

海と山に囲まれた美しい自然を観光資源としている。

○海

- ① 青の洞窟
- ② 小樽海上観光船
- ③ 小樽港マリーナ
- ④ おたる水族館

○山

- ① 小樽天狗山ロープウェイ
- ② 朝里川温泉スキー場

・小さい規模でいろんなものが揃っているまちで、幕の内弁当のような観光資源があるといわれる

- ・観光遊覧船（小樽～祝津）絶景を楽しめる
- ・ボートクルーズなど海のアクティビティーも楽しめる

②めぐる おたる

運河の埋め立てをきっかけに、いつのまにか観光地になり、観光の歴史は浅い。

港町小樽は、大正12年に完成した小樽運河を利用して、港に停泊している船から物資を小船に積み下ろしをする物流拠点であった。周辺に広がる石造りの倉庫群が当時の隆盛ぶりを物語っている。

現在は、石造り倉庫群の内装を変え、グルメや土産物などで賑わう観光拠点となり、隣接する運河を中心に、全国ガラス工芸の展示や運河クルーズ、そして人力車やボンネットバスで、明治から大正、昭和の道内最大の商都として栄えたことをしのばせる日本銀行旧小樽支店、旧北海道銀行本店、旧三菱銀行・旧三井銀行の小樽支店などの歴史的建造物などの名所めぐりなどで、観光地としての雰囲気を出している。



また、北海道開拓時に最初に鉄道がひかれたところで、運河からの線路跡は公

園に整備し、観光名所として、散策できるようになっていた。

夜はボランティアの観光ガイドさんが小樽の歴史を説明して、歴史的建造物などの街中観光を行うなど、積極的な市民ボランティアの活動がみられた。

堺町通りでは、ガラスやオルゴールの製作を体験して、オリジナルなものをつくってもらい、また、夏は浴衣まつりなどを行い、港町としての昔からの街並みを楽しんでもらうなど、若者の観光客の目線に沿った企画がなされていた。

③ ほおぼる おたる

運河周辺は、後志の特産品である海産物市場やレストラン・カフェ、喫茶店に、そして寿司屋通りでは日本海沿岸で獲れた魚介類をネタに旬の味を提供し、「食べ歩きエリア」として、多くの観光客で賑わっていた。

寿司屋通りは、市内のお寿司屋さん仲間が25年前に「近海魚を使って寿司屋横丁をつくろう」ということで、お魚供養感謝祭などのイベントがなされていた。

小樽では、半世紀以上前の歴史のある「あんかけ焼きそば（昔ながらのご馳走）」がB級グルメでグランプリを受賞したことから、観光客からの人気メニューとなっていた。

④ もっと おたる

○祝津エリアでは、鯺漁で栄えた建物として、「にしん御殿」や網本の別荘があり、その建物を利用して食を楽しんでもらう「鯺まつり」などのイベントを行い、食育として子どもたちに魚を知ってもらう活動もされている。

○天狗山エリアでは、ロープウェイによって夜景を楽しめ、「北海道三大夜景」のひとつである。

○朝里川温泉エリアは、札幌から近いスキー場として、変化に富むコースが魅力で、海が見え絶景が楽しめ、夜は温泉に泊まるということで、観光客に喜ばれている。

3. 観光客の推移について

① 数字でみる小樽観光

1986年 小樽運河の整備をきっかけに、1997年には606万人と、約20年で3倍に観光客が増加した。1999年には、大型商業施設ができたことで、972万人とピークになったが、不景気となり毎年減少し、2011年東日本大震災で603万人と最低となった。その後は、いろいろな取り組みと景気の回復、円安傾向もあり、徐々に増加傾向にあり、去年は710万人であった。(別添参考資料の通り)

【入り込み客数の内訳】

- ・ほとんどが道内からであるが、LCC（千歳空港への直行便）が増加しているため、昨年以降は、道外からの入り込み数も増加してきた。
- ・道内客のうち、札幌圏が7割以上を占めている。

【宿泊客割合】（課題のひとつ）

全体の85%が日帰り客。宿泊施設の稼働率 6月から10月までは約8割を超えており、現状の宿泊施設数としては限界であるが、閑散期の入込客の増加をどのようにしていけるかが課題となっている。

そのため、2月については、札幌の「雪まつり」に合わせて、小樽では雪道をろうそくの灯りで灯す「雪灯りの道」（10日間）というイベントをして、集客している。

【外国人宿泊観光客】

円安傾向に加え、昨年7月に始まった東南アジア5カ国に対するビザ発給要件の緩和などにより、対前年度比で160.2%の72,860人となり過去最高を記録している。

近年は、海外からの観光客も増加傾向にあり、様々な取り組みがされており、入り込み要因を以下の通り国別に列挙した。

- 香港 宿泊施設が香港の旅行代理店などへ、積極的に営業をしている。
- 台湾 親日の方が多く、観光先には小樽が人気になっている。
- 中国 国交親善の状態に影響を受け、インデンカード使用の可否など要因も

影響される。

- 韓国 映画ラブレター（中山美穂主演）のロケ地になったことで、小樽が有名になり、訪れる人が多くなった
- タイ 昨年10月から千歳空港への直行便が毎日運航となったため、対前年度比率で伸び率1位となった。
- ロシア 観光目的でなく、中古車の売買で長期滞在される方が多い。
- オーストラリア 特にバケーションを楽しむ観光客が訪れる傾向にある。

② 2014年度 観光誘致施策体系

小樽観光協会では、小樽市：観光振興室と密接な連携を取り、観光誘致施策を実行している。

○外国人観光客誘致

- ・東アジア圏等観光客誘致広域連携事業は、札幌市と北海道運輸局が連携し、主に香港、台湾、中国などに向けて誘致活動をしている。
- ・小樽・北後志広域インバウンド推進協議会において、北後志6市町村と連携している。
- ・国内外観光客誘致実行委員会は、小樽観光協会と小樽市：観光振興室の委員で構成されており、主に東南アジア圏をターゲットに誘致活動をしている

○国内観光客誘致

- ・観光広告プロモーション事業と観光誘致促進事業

○受け入れ体制強化

- ・観光案内所運営 小樽観光協会事務局で委員会を立ち上げた

4. 観光振興推進のための主な取り組みについて

小樽市から小樽観光協会へ専務理事として1名出向させ、宿泊施設での経験をもつ事業推進マネージャーを中心に事務局が運営され、ボランティアで構成する5つの実行委員会が、昼夜を問わず仕事時間の合間を見て、自主的に会合を積み重ねて、それぞれの役割分担の下で取り組まれていた。

（実行委員の構成及び平成26年度観光誘致施策体系については、別添書類のとおり）

① 一般社団法人小樽観光協会の平成 26 年度事業方針と取り組みについて

○方針（定款に準ずる）

- ・小樽市及び、後志・札幌圏を中心とする地域観光資源の開発と紹介宣伝を行う。
- ・観光施設の整備改善、観光関係者の資質の向上等に努める。
- ・地域の観光産業の健全な振興を図る。
- ・観光旅行者の利便の増進に努める。

○おもな取り組み事業※（）は、協力委員会

- ・観光宣伝と観光客誘致促進（情報センター委員会、誘致促進委員会）
- ・観光資源の保護及び活用の促進（おもてなし推進委員会、会員交流まちづくり委員会）
- ・ホスピタリティーの向上及び観光意識の向上（おもてなし推進委員会、会員交流まちづくり委員会）
- ・観光事業の調査研究（情報センター委員会）
- ・観光関係情報の収集及び提供（情報センター委員会、誘致促進委員会）
- ・観光関係諸機関との連携

② 観光客誘致の推進活動

○事務局

- ・観光広告を掲載（北海道新聞・若者の雑誌）

○誘致促進委員会 約 70 名のボランティアで運営されている

- ・キャンペーン（国外・国内・道内）で P R 活動を実施

【海外誘致】

香港からの個人旅行者を増やすため、香港の旅行会社を招待して宣伝する

【道外誘致】

大阪や東京で小樽のキャンペーンを実施し、その後、旅行会社への宣伝を 8 人で実施した。

【道内誘致】

旭川で小樽のキャンペーンや大型商業施設のイオンで観光物産展を実施した。道内の観光案内所などにパンフレットラックの設置を推進している。

【全国】

福利厚生会報誌向け広告掲載をし、国内の団体に直接 P R している。

○総合情報センター委員会

- ・マップ「すぐそこ小樽」の発行
- ・観光ガイドマップ事業
- ・協会ウェブサイトの運営 どういうふうに散策すのかを教える
- ・メールマガジンの発信
- ・宿泊施設の稼働率調査 札幌市内の大学生へアンケート調査を行い、実態調査結果を基に、何ができるかを考える。

○会員交流まちづくり委員会

- ・会員へのサポートをする OHM48のマップでお店の宣伝をする。

○おもてなし推進事業委員会

- ・観光客へ無料の傘を貸出しする

○冬季イベント実行委員会

- ・11月から入り込み客数の落ちる時期に、雪物語 小樽ロング クリスマスなどのイベントをプロモーションしている。

5. 所感

小樽市は、汚泥した運河を埋め立てるか、運河として再生するかの運河論争により、市民のまちづくりに対する意識が高まり、昭和61年運河整備完了後、再生した運河や倉庫群を含む歴史的建造物などが形成する独特な都市景観を利用して、国内のみならず東アジアでも有名な観光都市に発展してきた。

その結果、観光経済波及効果は、市内の観光に関わる売上額が市内総産出額の31%を占めるなど、観光の発展は、大きな経済効果をもたらした。

また、観光関連産業で雇用が増加し、小樽市の基幹産業の一つと言われるまでになった。

これら観光都市としての実現に向けては、平成20年に議会決議された「小樽観光都市宣言」により、市民、観光事業者、観光関連団体、経済界、行政の意識が結集され、その実施母体として「社団法人 小樽観光協会」が有機的に機能して、観光客誘致を推し進めていることに感銘を受けた。

本市と小樽市は、ともに海（湖）と山に囲まれた自然環境という共通点がある。

また、本市は、国際的な観光地である京都市に近接し、小樽市は道内一の観光地である札幌市に近隣しており、かつ歴史的建造物などの観光資源の面でも

共通点が多くある。

一方、小樽は11月から3月まで厳寒期になるため、観光入込客の減少は避けられない気象条件にある。

そうした環境下にあって、観光都市を目指し、小樽観光協会の実行委員の方々が中心となり、観光振興を推し進め、それが小樽のまちに賑わいを作って、商業施設が活気づいている取り組みは、本市の観光施策実現に向けた取り組みをする上で、貴重な知恵と関係者の積極的な情熱に共感を得ることができた。

本市における、魅力的な観光ルートづくりや来訪者の受け入れ体制、そして観光資源の発掘、創出・活用など、さまざまな課題を実現していき、それを地域産業の振興と活性化へと繋げていく政策提言をする上で有益な視察となった。